

蹟、經典等を夫々刻絲又は刺繡を以て再現し、冊子、卷子、軸裝等になせるもので、染織工藝としてのみならず繪畫史的にも極めて興味ある幾多の作品を包含してゐる。而も宋代の作に擬せられたるもの總數二十餘種の多きに及び、其大半が技法及び傳來よりして首肯するに足るは本蒐集を最も價値付けてゐる點であるが尙故宮舊藏品が尠からず包含されてゐることも附記さるべきであらう。友邦滿洲國が建國日尙淺く諸般の國家的機構の充足に寧日なき觀ある現狀にも拘らず、一方文化的施設に深く留意するところあり、夙くも國立博物館の開設を見るに至り、而も其開館記念として本書の如き其内容外觀共に眞の豪華版と稱すべきものを公刊されたるは實に學術的貢獻に止らず、新興滿洲國が自國の文化的施設に對して抱懐する深き關心と意圖とを最も具體的に表明せるものとしても極めて時宜に適應する有意義なる企圖と云ふべきであつた。(石澤)

和裝 圖錄一尺八寸五分 幅一尺三寸 厚四寸五分 解説一尺三寸四分 幅九寸
厚五分 全五冊 圖錄二冊 圖版一四二葉 解説和、漢、英文各一冊(和文、五六頁
漢文、本文二二枚 附録存素堂刺繡錄三一枚 英文、九九頁) 康徳二年五月出版
座右寶刊行會發行 定價三五〇圓

岩波講座日本歴史

前號に引續き、美術に關する左の五篇を紹介し、本講座の書評を終る。嚮の日本文學の講座につゞいて多數權威ある論述を集めた刊行者の努力を多とする。

日本佛塔建築の變遷 伊東忠太

内容の主部をなすものは第一章總説、第二章塔の經歷、第三章塔の沿革の三章にして僅々二十數頁を出でざるものである。その説く所は標記の如く主として日本に於ける木造佛塔に限る。今問題を此に限り、能ふ限りの要約を爲したとしても此の短き記述によつて本邦佛塔建築の變遷の大槩を悉すことは到底不

可能事である。斯の老熟達識の大家の筆餘に成るものにして尙讀了一過、新味の溢るゝものなく、説いて甚だ憚らざるを覺えるは已むを得ざる所であらう。若し編者が全體の結構上この問題を日本歴史講座の一部として採用することの必要を認め、而して略これだけの分量を豫定したものであつたならば編者の識見の不足を責むべきであり、又若し著者が勞を惜んで此に至つたとすれば、老大家の爲に甚だ採らざる所である。

内容に於ても特殊の研究、見解が提示されてゐるものでなく、著者が時に觸れて既に幾度か説き古されたものゝみであるから特に新しく批評すべきものもない。唯全般の記述法に於て様式的分類が過重視されて歴史の變遷に關する記述が甚だ疎略であることは特に此講座の目的とする所に照して遺憾を感じる次第である。

藤原時代の彫刻 丸尾彰三郎

「特に定朝様式の成立とその製作について」と云ふ副題がある。この廣汎な問題を概説的に鳥瞰する態度を棄て、最も代表的な作品を選び、その様式の成立の經過とその様式の性質とを説いて、時代彫刻の中心的特色を明かにしたものである。その述べ方は素より考證的ではなく、また抽象的な様式論でも文化的な時代性を重點としたものでもなくて、材料の構造とその取扱の技法の變遷を主題にとつた、云はゞ地味な具體的な態度である。著者は自分の採つたこの方法をも概念的であり、筋を辿るに過ぎないと云つてゐるが、讀んで與へられるものは極めて具象的な時代彫刻の特徴である。

内容は約一頁の緒言以外を前、中、後の三篇に分つた約六十頁の記述と巧みに之に利用された三十圖の小圖版とから成るが、記述の内容は略三分して初の一が藤原彫刻の概観、次の一が前代様式即ち一木彫の特性とそれから藤原様式の完成までの推移、最後の二が時代の代表作としての鳳凰堂本尊阿彌陀如來像の詳細なる觀察に充てられてゐる。

論述の進行は著者一流の細かさを伴ひつゝよく適確な觀察を物語り、迨に獨自の壇場に在る事を示すものであるが、若し強ひて云はゞその細かさが、例へば初頭の康尙の作品を説くあたりは、最も著者の見解に聽くべきものを持ちながら非専門的な一般の讀者にとつては或は多少難解の感を與へはしないかと思はれる。但し素より本書の瑕疵に數ふべきものではない。

室町時代の工藝 笹川 種郎

本篇は時代概説にはじまり、髹漆、染織、陶磁、金工の各々に分ち記述されてゐる。

髹漆に於ては蒔繪師幸阿彌、五十嵐二家の歴代について記し、又當代蒔繪の特色、蒔繪に於ける支那との關係等を述べてゐる。染織にては機業を大略し、金襴の起り、印金、摺箔、刺繡、緞縵の事等にふれ、つゞいて小袖の當代よりの變遷を説いてゐる。陶磁は瀬戸初代藤四郎を語り、美濃焼の起りをはじめ各窯を略記し、祥瑞五良大夫の傳を記すに著者は特に彼が我國にて陶器を焼かなかつた事を唱へて居り、次いで樂焼、土風呂師、茶入の起り等を述べてゐる。金工は甲冑工明珍家の諸代を挙げ装劍彫金の後藤の祖を語り、又鐔工を説き終りに刀鍛冶についてやゝくわしく述べて居る。

本篇平易簡明にて室町時代工藝の概要を知るに便なるも、やゝ列記體に偏し、我が工藝品が眞の工藝品としての本性を發揮し近世工藝の發展の起りをなした當代の意義、價値に言及されること尠く、又一つの遺品をも示されることのないのは、紙數其他に拘束多き講座の一篇なる爲としてもいさゝか遺憾とするところである。

安土桃山時代の繪畫 田中 豐藏

本書は先づ序説に於て「天下取り」の一語に盡きる此時代の精神を説明し、權力の象徴としての街耀的誇示的な金碧青緑の障屏畫の發生、且つ其精神の裏

に流れる一種虚無的な思想を指摘して枯淡な水墨の障屏畫の存在理由を説き、更に當代障屏畫の特色を論じて様式的發生及び發展の方向を一瞥し、それ等障屏畫研究の困難なる事情を述べて共同製作、款印の問題に及んでゐる。著者は以上の序説に本書の前半を割き、後半に於て夫々章を設けて代表的巨匠永徳、友松、等伯、山樂に就いて文獻及び問題となる作品を擧げて作風を窺ひその影響を考へて畫界の大勢を彷彿せしめる。其處に擧げられた作品は概ね定説あるものであるが、その所説には獨自の見解と基礎付を見るべく、又特に著者の主張として注目せらるゝは、妙心寺所藏の傳友松筆太公望商山四皓及び、嚴子陵虎溪三笑の屏風を山樂に、智積院方丈の襖繪を等伯に擬せんとする試みであつて、傾聽に價ひするは云ふ迄もない。而して最後に餘論として上に漏れた作家作品の補遺をなしてゐる。

かゝる小冊子に於て一時代の概観をなすことは至難の業で、往々内容の偏頗に陥り易いものであるが、本書は巧みに紙幅を按配して時代の概観を示し、よく概説としての任を果すと共にその重厚なる所説は専門學者に對しても誨ふる所が尠くない。近來殊に發表せらるゝ事稀な著者の近業としても亦注目すべきものである。

江戸時代の工藝 奥田 誠一

本篇は一、序説に於て江戸時代の社會的概観及びその文化的變遷と工藝との關係を述べ、二、慶長から寛永に至る初期を桃山趣味の殘映せる期間、三、元祿を中心とせる前後を町人趣味の勃興と上方風影響の時、四、安永天明頃を江戸趣味發達の期、五、化政度より幕末に至る間を玩弄趣味より工藝の遊戲化せし時代とし、各章陶磁工、金工、木漆工、染織工を分ち敘し、よくその小なるものまでに言及して居る。六は江戸期工藝の特色として形式、表現、技巧の異常なる進歩、工藝の民衆化、地方工藝の隆盛を擧げ、又工藝本來の目的たる實

用方面が無視され單なる玩弄の具に墮するに至つた弊を述べ、七、結語として江戸工藝を過去からの工藝的遺産の集大成なりとしてゐる。

説くところ工藝は時代の思潮によつて制約され、型作られるもの、それは更に時の社會組織、經濟機構の動向に遠因するものたるの觀點から進められてゐるは本篇の特色とするところであり、複雑多岐なる江戸時代工藝を概知するに誠に恰好なる一篇である。

(以上編輯部)

菊判假綴 各册本文二〇頁乃至六六頁 網目版圖版及挿圖 昭和九年十月—昭和十年二月 岩波書店發行

美術研究所時報

寄贈圖書

印度に禮拜像の形式研究(東洋文庫論叢第二十一) 逸見梅榮著

東洋文庫

陶器大辭典 卷二

小野賢一郎氏

恩賜京都博物館講演集 第十二

恩賜京都博物館

文學 三〇七・八

日本建築士 一七〇一・二

思想 一五七

書畫骨董雜誌 三二六

校友會會報 五

みづゑ 八月

大正大學々報 二〇

美育 一一〇八

塔影 一一〇七

日本美術協會報告 三七

南畫鑑賞 四〇七・八

圖畫と手工 八月

美術評論 四〇五

中國營造學社彙報 五〇三

繪畫教習 三〇八

汎工藝 一三〇五

學校美術 九〇八

建築雜誌 四九〇六〇一

浮世繪藝術 四〇七・八

國際建築 一一〇七

Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. XXX, No. 6.

Bulletin of the Cleveland Museum of Art, Vol. XXII, No. 6.
Wienerbeiträge zur Kunst und Kultur Asiens, Bd. IX.